

ひと



土木の神様と称され、
“せいしよこさん”と
親しまれる加藤清正。
240年にわたり肥後を
治め、数々の歴史文化を
遺した細川家。
熊本には加藤家・細
川家が築いた「歴史」と
「文化」が根強くのこり、
長い時を越えて受け継
がれています。彼らは、
この熊本の地でいつた
いどのように過ごして
きたのでしょうか。



加藤・細川ヘリテージ(遺産)プロジェクト 「くまもと歴町50選」 れきまち

熊本県内に残る
伝統的建造物を中
心に構成された、
古い町屋等が連な
る町並みや、周囲
の景観と調和した
歴史的、文化的な
町並みなど、後世
に残すことが望ま
しい町並みを「く
まもと歴町」とし
て選定しました。
建造物とは、建物
だけでなく、橋や
水門、石垣といっ
た土木的構造物も
含まれます。

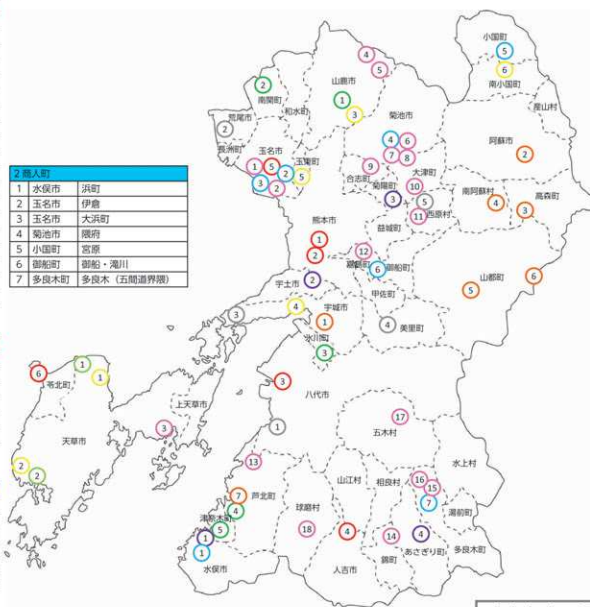
くまもと歴町50選 選定箇所 (43団体 60地区)

- | 1 農村 |
|----------------------|
| 1 玉名市 山田 |
| 2 玉名市 橋島町・大浜町 |
| 3 天草市 倉島町穂底 |
| 4 山鹿市 鹿北町藤原 |
| 5 山鹿市 菊鹿町橋所 |
| 6 菊池市 旭志并利 |
| 7 菊池市 赤星 (井手界隈) |
| 8 菊池市 塚地 (井手界隈) |
| 9 吉志市 上庄・竹道 |
| 10 大津町 陣内 |
| 11 西原村 門出 |
| 12 高島町 井手・下六蔵 (浮島さん) |
| 13 芦北町 田浦 |
| 14 錦町 木上 |
| 15 多良木町 黒肥地 |
| 16 多良木町 中瀬 |
| 17 五木村 平野 |
| 18 球磨村 毎床 |
| 8-02 天草市 錦津・今富 ※再掲 |

- | 2 集落町 |
|--------------------|
| 1 水俣市 浜町 |
| 2 玉名市 伊倉 |
| 3 玉名市 大浜町 |
| 4 菊池市 徳府 |
| 5 小国町 宮原 |
| 6 御船町 御船・滝川 |
| 7 多良木町 多良木 (五間道界隈) |

- | 3 城下町及び五ヶ町 |
|---------------|
| 1 熊本市 古町 |
| 2 熊本市 川尻 |
| 3 八代市 西松江城町周辺 |
| 4 人吉市 鍛冶屋町 |
| 5 玉名市 高瀬 |
| 6 苓北町 福岡 |

- | 4 在町 |
|--------------|
| 1 天草市 五和町留嶺 |
| 2 天草市 高瀬 |
| 3 山鹿市 熊本町栄民 |
| 4 宇城市 不知火町松合 |
| 5 玉東町 木原 |
| 6 南小国町 市原 |



- | 5 武庫地 |
|-----------------|
| 1 水俣市 陣内 |
| 2 宇土市 船場町・石小路町 |
| 3 菊陽町 原水 (鉄砲小路) |
| 4 あさぎり町 上籠 |

- | 6 市場町 |
|--------------------|
| 1 宇城市 小川 |
| 2 阿蘇市 坂梨 (坂梨市場町) |
| 3 高森町 高森 (高森商店街) |
| 4 南阿蘇村 吉田新町 |
| 5 山鹿町 浜町 (浜町商店街) |
| 6 山鹿町 馬見原 (馬見原商店街) |
| 7 芦北町 佐敷 |

- | 7 町屋並みの町 |
|------------|
| 1 山鹿市 豊前街道 |
| 2 菊陽町 関 |
| 3 芦北町 宮家栄久 |
| 4 芦北町 湯浦 |
| 5 津原木町 竹中 |

- | 8 楽町 |
|----------------|
| 1 天草市 五和町二江 |
| 2 天草市 河浦町錦津・今富 |

- | 9 その他 |
|------------------------------|
| 1 八代市 日赤久 |
| 2 荒尾市 万田坊及び宮益都市と
筑後専用鉄道敷道 |
| 3 宇城市 三角 (三角西港) |
| 4 美里町 小程・佐俣 |
| 5 西原村 新所 |

加藤 清正

かとう きよまさ

熊本城築城の際、「熊本」という地名を命名。



死後400年以上経った今でも、熊本では「せいしよござん」という愛称で親しまれている加藤清正。一介の武将から肥後熊本の大名まで上りつめた清正は、熊本の地に多くの遺産を残しています。

清正は豊臣秀吉の遠縁ともいわれ、10歳頃に秀吉の小姓こしやうとなりました。秀吉のもとで武将のイロハを学びながら、様々な合戦に従軍し、秀吉の天下統一を支えました。柴田勝家との賤ヶ岳しずがたけの合戦では「七本槍」の一人と讃えられ

るほどの活躍をみせました。その後の小牧・長久手の戦い、九州攻め、文禄・慶長の役などで数多くの武功をあげています。

秀吉の九州平定の際、肥後熊本は佐々成政に託されましたが、肥後国衆一揆が起こり、成政はその責任を取って切腹。その後熊本北半分が清正に、南半分が小西行長こにしゆきながに任せられました。関ヶ原の戦いでは徳川家康の東軍に

味方し、西軍の小西行長の宇土城を攻めるなどし、その恩賞として肥後熊本一国を与えられました。慶長12（1607）年に、熊本城を完成させ、その際元々の名前であった隈本を熊本と改めました。今の熊本市中心部は、そのほとんどが清正の城下町作りで出来たと言えます。

熊本城あれこれ

加藤清正は朝鮮出兵の際、朝鮮の蔚山城うらやまじょうで籠城を余儀なくされ、大変な思いをした。熊本城築城に際しては、その経験をもとに、井戸を120も掘り、生木でも薪になるくすのき、食用となるイチヨウを城内に多く植えた。その他にも、石垣を巧みにそり返した「武者返し」など様々な工夫を凝らしている。熊本城は、西南戦争の折、兵力が4倍の薩軍に52日間耐えたことでその堅牢さが実証された。



天守閣とイチヨウ



熊本城本丸御殿・昭君之間

加藤清正は熊本城築城に際し、藩主の居間や部下と対面する場所として本丸御殿を作りました。畳数1570畳、部屋数53もある建物群で、その中の大広間には、昭君之間と呼ばれる部屋があり、豊臣秀吉の子、秀頼に万が一のときは、この熊本城に迎え入れる予定であったという説話も残っています。

治水・土木の神様と慕われた清正



鵜の瀬堰

清正は27歳で熊本北半国の領主となつて以来23年間、熊本の藩主として熊本城築城、城下町の整備に加え、玉名から阿蘇・八代まで、河川の改修や新田開発等、土木工事にも寝る間を惜しんで取り組み続けました。そのため熊本では治水・土木の神様としてあがめられています。

清正が藩主であつた時期に作られたものとして、甲佐町の鵜の瀬堰、菊陽町の鼻ぐり井手、球磨川の遙拝堰。また河川改修工事として菊池川の石塘、加勢川改修工事で作られた江津塘（この塘のおかげで江津湖ができたと言われています）、暴れ川と呼ばれていた

白川と坪井川を分離するための石塘など、県内のいたるところで事業を行っています。他にも横島干拓や八代干拓などを行い、治政23年間で多くの農地を作り出しています。

朝鮮出兵等により熊本に腰を据えていた期間が短かつたにもかかわらず、このような土木工事を成し上げた清正に対して、熊本の領民達の人望は厚く、のちに熊本藩主としてやってきた細川忠利は領内に入るときに清正の位牌を先頭に立たせ、また熊本城から菩提寺である本妙寺に向かい「あなたの領地をお預かりします」と深々と頭を下げたと言われています。

また、中央では徳川家康と豊臣秀頼との間を仲介し、京都の二条城で二人の会談を成功させます。その帰り道の船中で発病し、帰らぬ人となつてしまいました。享年50歳、亡骸は本妙寺に葬られています。そこから更に石段を上つた場所には、清正の銅像が建つていて、今も熊本城と熊本市内を見守っています。

※堰：ダムのようなもので、川の水をせき止める構造物。

※塘：川の兩岸を堤防のように高く積み上げる土手。つつみ。



本妙寺浄池 廟

人吉・球磨 「清正公岩」

八代と人吉をつなぐ肥薩線の球泉洞駅の下流側にある岩山は清正公岩と呼ばれている。この名の由来は、加藤清正が相良氏を討つために、軍勢を引き連れ球磨川をさかのぼってきたが、こ

の岩に登り球磨川の上流を眺めると、険しい山ばかりが重なりその先の人吉方面がどこかもわからなかつたために、攻めることをあきらめてここから引き返したと伝えられていることから、その名がついた。

清正年表

1562	永禄 5年	尾張国愛知郡中村（現名古屋）に誕生
1580	天正 8年	豊臣秀吉から120石を与えられる。
1583	天正11年	賤ヶ岳の戦いで「賤ヶ岳七本槍」の一人に数えられる。
1588	天正16年	27歳で肥後北半国の領主となる。
1588	天正16年	菊池川河口の堀変え
1589	天正17年	玉名郡横島干拓工事開始。天正天草合戦。
1592	文禄元年	文禄の役で朝鮮半島へ渡海
1597	慶長 2年	慶長の役に先鋒として出陣。蔚山城籠城。
1600	慶長 5年	関ヶ原の戦い
1601	慶長 6年	肥後54万石の大名となる。
1611	慶長16年	逝去

人物伝
加藤家2代

加藤 忠広

多くの悲運を重ねた二代目

慶長十六（1611）年、徳川家康と豊臣秀頼の会見に立ち会った加藤清正は船で熊本へ帰る途中倒れ亡くなりました。跡継ぎの虎藤（後の忠広）はまだ11歳。加藤家重臣たちの必死の奔走により、五人の家老による合議制による執政が幕府に認められ、藩の取りつぶしを免れることが出来ました。

しかし元和四（1618）年、家臣の牛方派と馬方派の内紛が起こり、それぞれの幕府への訴えは決着がつかず、直接將軍の裁可を仰ぐと言う醜態をさらしました。ただ將軍徳川秀忠の

養女・琴姫との婚姻が幸いしたのか、年若くまだ政務を執っていないかつたとして、忠広自身は責めを免れました。

元和五（1619）年には熊本で大震災が起こり、八代の麦島城が倒壊、また新大坂城の天下普請など、藩の出費がかさみました。

しかし大坂城普請に際しては、大手門石垣や天下一の巨石で天守台を築くなど、清正以来の築城技術の面目躍如を見せました。

その後、寛永9（1632）年幕府



清正は暴れん坊將軍の
ひいおじいちゃん？

加藤清正と正室である清浄院（かな姫）の間に生まれた八十姫（苦がないよつ）という願いで付けられたとも）は、家康の子・初代紀

伊藩主徳川頼宣へ嫁ぐ。その後頼宣の側室が紀州二代藩主である徳川光貞を産み、光貞の子が暴れん坊將軍でお馴染みの八代將軍・徳川吉宗。

より「平素の行跡正しからず」の名目で肥後54万石は没収との命令が下りました。忠広の処遇は、出羽（山形県）の庄内藩主に預かりの身で、一代限り一万石の沙汰でした。従ったのは母の他、家臣など五十余名。22年後の承応2（1653）年に53歳で亡くなりました。

忠広年表

1601	慶長 6年	加藤清正の三男として誕生
1611	慶長 16年	清正死去により家督相続
1614	慶長 19年	將軍秀忠養女・琴姫と結婚
1615	元和元年	大坂夏の陣で豊臣家滅亡
1618	元和 4年	牛方馬方騒動が起こる。
1620	元和 6年	新大坂城の天下普請
1632	寛永 9年	大御所秀忠死去
1632	寛永 9年	加藤忠広改易 出羽庄内1万石配流
1633	寛永 10年	徳川忠長切腹（駿河大納言事件）
1653	承応 2年	逝去

改易後の忠広

忠広は、出羽（山形県）の庄内に入った後、失意のうちに過ごしたかといえはそうでもなく、文学や音楽に親しみ、書を楽しんだり、和歌を詠んだり、かなり自由な生活を楽しんでいた様子がうかがえる。1万石の出羽丸岡藩主になったが、年貢の取り立てなどは庄内藩の代官がやってくれたので、家臣達はもっぱら忠広の身辺に仕えただけで、肥後に残っていた祖母（正應院母）も呼び寄せて22年間を静かに過ごした。

天正天草合戦

戦国時代、天草は天草五人衆と呼ばれる国衆達に統治されていたが、肥後半国の領主となった小西行長の命令を聞かず、ついには戦いとなった。小西軍の応援に加藤清正が参戦し、天草

方の勇将木山弾正と一騎打ちを行い倒すなどして天草軍を撃破する。天草五人衆は降伏し、天草が小西行長の領地となったことで、よりキリスト教が盛んになった。これが後の天草・島原の乱へとつながっていくことになる。

えづこ
⑥ 江津湖 (塘) \ 車からチェック! /

今は上江津と下江津の2つの湖からなる江津湖。ここは加藤清正が江津塘を築いた際に、河川膨張湖になりました。今は、市街地にある市民のオアシスとして親しまれています。詳しくは、第2章水 (P.48) へ。



豊後街道菊陽杉並木

道路沿いに並ぶ杉並木は加藤清正が軍事、景観さらに熊本城の修築を目的に植えました。昔より数は少なくなりましたが、現も参勤交代の道の名残として多くの杉が立ち並んでいます。



data

熊本市東区広木町935-1
(水前寺江津湖公園管理事務所)
TEL 096-360-2620



コースチャート

土木の神さま編

- スタート
- 熊本駅
- 徒歩3分
- ① 石塘
- 車10分
- ② 熊本城
- 徒歩10分
- ③ 坪井川
- 車10分
- ④ 渡鹿堰
- 車30分
- ⑤ 馬場楠堰
- 車15分
- 豊後街道菊陽杉並木
- 車30分
- ⑥ 江津湖
- 車30分
- ゴール
- 熊本駅

ばばくすぜき
⑤ 馬場楠堰

事前予約でボランティアガイドさんの案内も!

馬場楠井手は、菊陽町馬場楠から、熊本市の大江渡鹿までの約12kmのかんがい用水路で、現在でも多くの水田を潤しています。馬場楠井手の注目ポイントが「鼻ぐり井手」。ぽっかり空いた水流穴は見物です。詳しくは第2章水 (P.45) へ

菊陽町文化財
ボランティアガイド
096-292-3200
(菊陽町南部町民センター内)



data

菊池郡菊陽町大字曲手

車で 30分

とろくぜき
④ 渡鹿堰

いずみ えつ はるたけ たむかえ ややす
出水、画図、春竹、田迎、世安方面に水田の農業用水を引くためにつくった堰。激しい白川の流りに沿うように工夫されたつくりになっています。昭和28年の大水害後にコンクリート堰に改修されました。



data

熊本市中央区渡鹿6丁目

徒歩 3分
Start
熊本駅

いし ども
① 石塘



熊本駅から白川沿いへ。白川と坪井川を分離させるために築かれた石塘が川の間を通るのが見えます。

data

くまもと森都心プラザビル近く

車で 10分

② 熊本城



ほほあてごもん
■ 頬当御門

8:30

おもてなし武將隊による開門口上。門衛の待っお城の正面玄関から熊本城へ。城を顔に見立てたとき、ちょうど顔の前に当てる甲冑(かっちゅう)の部品の「頬当て」に見えることから、頬当御門と呼ばれています。

data

熊本市中央区本丸1-1
TEL 096-352-5900 (熊本城総合事務所)
園高校生以上500円、小・中学生200円
館 4月～10月 8時30分～17時30分
11月～3月 8時30分～16時30分
休 12月29日～12月31日
駐 駐車場 有り

つばい がわ
③ 坪井川

車で 10分



熊本城の横を流れる坪井川。川沿いから眺める長堀は圧巻です。天気の良い日はのんびりするのびったり。詳しくは、第2章水 (P.42～43) へ。

徒歩 10分

■ 天守閣



守閣をはじめ、櫓や櫓門など見所満載。「武者返し」と呼ばれる優美な石垣と、自然の地形を巧みに利用した高度な築城技術が見所です。詳しくは、第5章城 (P.82～) へ。

土木の神さま?

加藤清正

熊本城築城をはじめとする様々な土木事業を成功させた加藤清正。今では土木(建築)の神さまともよばれています。



©熊本城おもてなし武將隊

徒歩 3分

人物伝
細川家初代

ほそかわ ふじたか ゆうさい
細川 藤孝(幽斎)

時の権力者二代にわたり
重用される。



古今伝授の間

関ヶ原の戦い直前、藤孝が西軍に攻められ籠城した際、古今和歌集の読み方や解釈を伝える「古今伝授」の唯一の伝承者である藤孝を救うため、後陽成天皇が勅使を使わされ籠城がとられました。水前寺成趣園にある古今伝授の間は、その後藤孝により古今伝授が行われた智仁親王の学問所を大正時代に移築したものです。

近世細川家の初代である細川藤孝は、明智光秀と共に織田信長の支援を受けながら室町幕府最後の將軍足利義昭を補佐しますが、後に信長の臣下となります。

本能寺の変に際しては、ガラシヤの父の明智光秀の誘いを拒絶、剃髪し幽斎と名乗ります。その後豊臣秀吉や徳川家康にも重用されていきます。藤孝は和歌や連歌にも造詣が深く、当代一の文化人であったことはもちろんですが、武芸にも秀でており、剣術は塚原卜伝に学び、弓道なども一級の腕前だったと言われています。藤孝は京都



で没しましたが、熊本市の泰勝寺にも墓所が残されています。

藤孝年表

1534	天文 3年	誕生
1546	天文 15年	元服し將軍足利義輝の側近となる。
1573	天正 元年	織田信長の家臣となる。
1582	天正 10年	本能寺の変時に剃髪し名前を幽斎と称する。
1600	慶長 5年	田辺城にて籠城。智仁親王に「古今伝授」を行う。
1610	慶長 15年	77歳で逝去

人物伝
細川家2代

ほそかわ ただおき さんさい
細川 忠興(三斎)

愛妻家であり、
茶人であった文化人。

細川忠興は藤孝の長男として生まれ、織田信長のおそば衆となります。また明智光秀の娘である玉(細川ガラシヤ)と結婚。信長より丹後12万石を与えられました。本能寺の変に際しては父藤孝とともに明智光秀に加担せず、隠居した父の代わりに当主となりました。

その後忠興は関ヶ原の恩賞として、豊前豊後の領地39万9千石が与えられ、中津城主へ、のちには小倉城へ移ります。隠居後は「三斎」と号し、嫡子の忠利が熊本藩主となった際は、八代城に移り住みました。

忠興は文武に秀でた大名で、蹴鞠、謡曲、連句・狂歌も多くなしたしなみ、特に茶湯は利休七哲と呼ばれるほどでした。



忠興年表

1563	永禄6年	誕生
1577	天正5年	初陣
1578	天正6年	明智光秀の娘玉と結婚
1620	元和6年	隠居し三斎と号する。
1632	寛永9年	八代城主となる。
1645	正保2年	83歳で逝去

八代と細川三斎

八代にやってきた忠興は、八代妙見宮の紋が細川家と似ていることから、妙見祭の復興を援助。また、隠居していた忠興の健康を願って住民が室に保存した残雪を献上したことから始まったのが氷室祭と言われており、八代と忠興は深い関わりを持っている。

人物伝
細川家3代
初代熊本藩主

細川忠利

肥後細川藩の初代藩主



北岡自然公園 妙解寺跡 忠利公廟

細川家の三代目であり、初代熊本藩主でもある細川忠利は、天正十四(1586)年に忠興の三男として丹後で生まれました。母は細川ガラシャこと玉。慶長五(1600)年の関ヶ原の戦い直前に徳川家の人質となり、十五歳で江戸へ出府。徳川秀忠に仕え、その信頼を得るとともに、名前を忠利と名乗りました。

慶長九(1604)年には兄二人をさしおき細川家の跡継ぎとなります。そして元和七(1621)年家督相続し、小倉城主となりました。

寛永九(1632)年5月に加藤忠広が改易されると、同10月將軍家光より肥後54万石が与えられました。同年12月には熊本城へ入ります。

寛永十四(1637)年に天草・島原の乱が起こると、すぐさま参勤先の江戸から熊本へ戻り、軍を指揮しました。家臣達も原城本丸一番乗りや天草四郎の首を取るなど活躍が目立ちました。

武蔵は熊本に来て武蔵になった。

寛永十七(1640)年、かの有名な剣豪宮本武蔵が藩主忠利の客分として熊本にやってきました。忠利はさっそく山鹿温泉に連れて行くなど武蔵を丁重にもてなしています。

武蔵が熊本に来た翌年、はからずも忠利は亡くなってしまいます。享年五十六歳でした。武蔵は忠利の喪があける三年後より霊巖洞(熊本市西区)に籠もり、「五輪書」と「独行道」を著しました。そして熊本に来て五年後の正保二(1645)年、62歳(64歳

説も)で亡くなりました。遺言により細川家の参勤交代を甲冑姿で見守るため、豊後街道(大津街道)沿いに葬られたと伝わっており、現在は武蔵塚公園として市民の憩いの場となっています。

武蔵は熊本に来て兵法書「五輪書」や国の重要文化財となった画など、多くの秀でた書や工芸作品を残しています。熊本に来て初めて武蔵は武蔵になり得たと言えるでしょう。

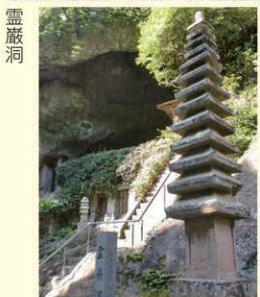
気配りの忠興と忠利

忠興と忠利はともに筆まめで、忠興が江戸にいる忠利に細かな指示を出すなど、その往復書簡は三千通にもほぼる。激動の戦乱を生き抜くためには、いかに情報が大事かを二人とも理解していたことが窺える。

忠利のお墓は熊本駅近くの妙解寺跡にある。現在は北岡自然公園となっており、忠利が亡くなった時に19人が殉死したが、その中には森鴎外の小説「阿部一族」によって有名になった阿部弥一右衛門の墓もある。



武蔵塚の宮本武蔵像



霊巖洞

忠利年表

1586	天正14年	細川忠興の三男として誕生
1604	慶長9年	忠興の嫡子となる。
1621	元和7年	小倉城主となる。
1632	寛永9年	熊本藩藩主となる。
1641	寛永18年	熊本で病死。墓所は熊本市の妙解寺、京都市の南禅寺



忠利と息子光尚が幽斎夫妻と三斎夫妻を祀った黍勝寺跡四つ廟

人物伝

細川家4代

2代熊本藩主

ほそかわ みつなお

細川光尚

天草・島原の乱に
出陣するも31歳で夭折。

細川家の嫡子であつた光尚は、天草・島原の乱が起こつた際、父忠利とともに沿岸警備や原城総攻撃に参加しています。

父が逝去した後は、天領（幕府の直轄地）となつた天草へ領民の移住を促進。また父の菩提寺として、妙解寺を建立しました。

祖父三斎の逝去後は、家老の松井興長を八代城代とし、以後松井家が八代を治めることになりました。また宇土にも支藩を創設。従弟の細川行孝に治

めさせます。また客分であつた宮本武蔵の死去に対しても、細川家の菩提寺で葬儀を執り行うなど、手厚い対応を行っています。

その後31歳という若さで急逝してしましますが、嫡子綱利が7歳という幼児であつたため、病床に伏せながら幕府へ願書を提出。これが心がけ神妙なりとして幕府の好感を得て、綱利の家督相続が決まつたと言われています。



光尚年表

1619	元和 5年	豊前中津にて忠利の嫡男として誕生
1637	寛永14年	天草・島原の乱に出陣
1641	寛永18年	父の死去により家督を継ぐ。
1643	寛永20年	父忠利のために妙解寺建立
1646	正保 3年	従弟細川行孝に3万石与え、宇土支藩を創設
1649	慶安 2年	31歳で逝去

人物伝

細川家5代

3代熊本藩主

ほそかわ つなとし

細川綱利

水を愛し、相撲を愛した、
生まれながらの藩主

父光尚が31歳という若さで逝去したため、わずか7歳で遺領相続。親戚であつた小倉藩主の小笠原忠真が後見役となり、熊本には幕府の目付が常駐していました。

綱利は熊本の水を愛し、初代忠利時代は茶室と茶庭だけだつた水前寺を、一万八千坪にも及ぶ桃山式回遊庭園である水前寺成趣園としました。他にも白川水源の白川吉見神社を保護するとともに、甲佐のやな場を整備し藩主専用としました。このような綱利の業績により、現在まで素晴らしい湧水とその風景が残されています。



ぎし

義士まつり(山鹿市日輪寺)

山鹿市の日輪寺には、忠臣蔵で知られる大石内蔵助良雄をはじめとする赤穂浪士17人の遺髪塔がある。細川藩士が赤穂浪士切腹後、山鹿に遺髪を持ち帰り、遺髪塔を建立し手厚く供養した。以来、地元の方々により供養は続けられ、毎年2月4日(義士命日)に「義士まつり(赤穂十七義士慰霊祭)」が行われている。



水前寺成趣園

力自慢だった綱利



八景水谷公園

相撲を非常に好んでいた綱利は、当時京都に居をかまえていた吉田司家を召し抱え、現在の藤崎八幡宮参道脇に住まわせました。吉田司家は行司の総元締めといえる名家で、熊本に招かれた後現在に続く「横綱」制度を考案し、その免許授与を取り仕切りました。そのため力士は横綱昇進に際して横綱免許授与のため熊本へ必ずやってきて、藤崎八幡宮で土俵入りを披露していましたが。綱利自身も力自慢だったらしく、大中小の3つの「力石」を重量挙げのごとく持ち上げるのが趣味だったそうです。現在も妙解寺跡の綱利のお墓には、その3つの力石が置いてあります。

また、綱利の時代に「忠臣蔵」で有名な赤穂浪士討ち入りがありました。綱利は忠義の臣として、彼らを厚くもてなし、幕府より切腹を言い渡された

八景水谷

綱利は県下各地に御茶屋を作り、その土地土地の湧水を楽しんだ。その中でもこの八景水谷は、中国の洞庭湖および湘江などの八景図にちなみ、綱利が詠んだ「三嶽青嵐、金峰白雪、熊城暮靄、壺田落雁、浮島夜雨、龍山秋月、亀井晚鐘、深林紅葉」の八景を表したものだ。また、八景水谷の地名は、谷水が出る「吐け（ハケ）」という地名にも由来するそう。

またこの八景水谷には着物姿の加藤清正像がある。



公園内の加藤清正像

綱利年表

1643	寛永20年	江戸にて誕生
1650	慶安 3年	父光尚が逝去したため、7歳で家督相続
1653	承応 2年	元服し綱利と名乗る。
1666	寛文 6年	弟の細川利重に3万5000石を与え、新田支藩設立
1702	元禄15年	大石内蔵助等による赤穂浪士事件で17人を預かる。
1712	正徳 2年	逝去



白川水源

時も、浪士達の血で染まった庭を清めず「彼らは細川家の守り神である」と終世そのままに残すよう命じたそうです。

綱利の時代の熊本は火災が多く、城下でも度々大火災に見舞われました。火災防止のために、道路拡張や区画整理が行われた結果、現在も坪井地区には「広町」という地名が残っています。

綱利は豪快な性格であり、華美を好むなど根っからのお殿様であったようですが、若い頃より漢詩文に親しみ、また弓・槍・馬術・柔術も名人並であったそうです。

甲佐のやな場

初代忠利が鷹狩りに際して、甲佐で捕れる鮎を好んだことから、綱利もよくここを訪れ、藩主専用のやな場を作った。以来歴代の藩主などから愛用され、現在にいたっている。

緑川では、6月1日のアユ漁解禁とともに釣り師達でにぎわう。緑川の鮎は色も形も美しいことから女鮎とも呼ばれており、身が柔らかいのも特徴。



甲佐やな場

人物伝

細川家6代
4代熊本藩主

ほそかわのぶのり
細川宣紀

漢詩に秀でた文人

宣紀は、先代綱利の弟利重とししげの二男として生まれました。元禄十(1697)年綱利の側近となり、宝永四(1707)年綱利の養子となります。正徳二(1712)年の綱利死亡にともない、家督を相続します。

先代綱利の時代に借金が増大しており、家督を相続した時点で藩の借金が37万両にも及んだことから、支払いを5年間延期して欲しいと幕府に願い出ることになってしまいます。しかしそれを幕府は拒否。藩財政最困難時に治

政がスタートしてしまいました。

そのため宣紀は家臣の地方知行(土地の支給)を廃し蔵米支給に変更、参勤交代時の従者を減らすなど各種政策を取ってはみたものの、相次ぐ凶作により苦勞します。

一方、宣紀本人は学問、とりわけ文学を好み、多くの漢詩を残しています。また、六代藩主重賢が設立した時習館じしゅうかんの学長となる儒学者、秋山玉山あきやまぎよさんを最初に見いだしたのも宣紀であり、享保八(1723)年に召し抱えています。



人物伝

細川家7代
5代熊本藩主

ほそかわむねたか
細川宗孝

非業の死を遂げた
若き藩主。

宗孝は享保三(1718)年熊本の花畑邸はなばたてで生まれ、三男でありながら跡継ぎとなりました。享保十七(1732)年に先代藩主宣紀逝去の知らせを受け、急きよ江戸へ赴き遺領相続します。

当時は、先代宣紀の時代から続く飢饉等に悩まされており、まだ若い宗孝の治政は多難をきわめました。

そのような中、延享四(1747)年8月15日、江戸城中において宗孝が小用で便所へ行った際、後ろからいきなり知らぬ相手に切りつけられ深手を負ってしまいます。江戸城内は大騒ぎ

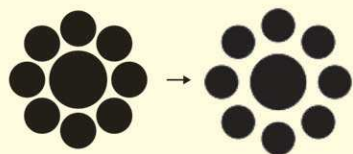
となり、大目付などが城門を閉ざし事情を聞くと、旗本の板倉勝該いたくらかつかねが自身の本家を恨み切りつけたが、当時は薄暗く板倉家と細川家の家紋が似ていたため、間違えたということがわかりました。

幕府はすぐさま板倉を切腹させ、翌日宗孝が死亡すると、藩の相続は心配ないので、報復はしないようにと細川家へ言い含めます。その後細川家では新しい九曜紋くわうぎもんのデザインに変更するとともに、羽織に付ける紋を通常5カ所から7カ所に増やしたそうです。



宗孝年表

1718	享保 3年	熊本花畑邸で誕生
1732	享保 17年	宣紀逝去の知らせで急ぎ江戸へ赴き元服を済ませる。
1734	享保 19年	肥後に初入国
1747	延享 4年	江戸城中にて切られ、翌日逝去



九曜紋 → 細川九曜紋

人物伝

細川家8代

6代熊本藩主

ほそかわ しげかた 細川 重賢

肥後の鳳凰といわれた名君 (宝暦の改革)

重賢は四代藩主宣紀の五男として生まれしました。当時、二男三男までは跡継ぎ候補でしたが、それ以下は他家に養子にでるか部屋住みとなる等、一生貧乏で終わることが多く、重賢も苦しい生活だったようです。しかし、兄宗孝の突然の死によって、急きよ藩主となりました。当時の熊本藩の財政は凶作等も重なりまさに火の車と言える状態、支出43万石に対して実収30万石という、どうしようもない所まで来ていました。

そのため、重賢は行政機構の改革

から始めます。まず行ったのは組織改革と腐敗一掃でした。特に役人の世襲制を廃し、総奉行以下6人の奉行を能力主義で抜擢しました。

また新たに検地を行い、帳簿と現状を照らし合わせ農民の不公平感を解消するとともに、隠し田などを摘発し、年貢の増収を図りました。一方、資金調達は旧来の大坂商人などからはこれ以上借りることが出来なかつたため、新興商人との関係を深め、新たな資金調達を図りました。

人材育成機関を創設

重賢は熊本藩の将来を担う人材育成のために、自分の上下に関わらず、家老の認可があれば誰でも入学できる藩校「時習館」を設立しました。また藩立の医学校として「再春館」と、付属の薬園「蕃滋園」を設立。ここからも多くの有能な医師を輩出しました。



時習館があった熊本城二の丸

産業の振興と刑法改革

それまで年貢米だけに依存していた藩の収入体制を見直し、ロウソクの原料となる燼はすの植樹を促し、紙すきなども奨励しました。これらの産業を専売化することで、藩に多くの利益を生み出しました。

重賢は刑法にも変革を与えます。行政と司法を分離した日本初の「刑法草案」を制定。それまでの刑法では死刑か追放刑が主だったのですが、追放刑をむち打ち刑と懲役刑に分けました。また、罪人の手に入れ墨を入れていましたが、それをなくすことで罪人の社会復帰を促しました。

重賢の様々な改革により藩の財政は好転化し、「宝暦の改革」と呼ばれるとともに、「紀州に麒麟きりん（紀州藩の財政再建を行った九代藩主徳川治貞）、肥後に鳳凰」と詠われるほど全国的に評価を受けました。

重賢年表

1720	享保5年	宣紀の五男として誕生
1745	延享2年	宗孝の仮養子となる。
1747	延享4年	宗孝の突然の死によって家督相続
1752	宝暦2年	宝暦の改革に着手する。
1785	天明5年	江戸にて逝去

明治の刑法に影響を与えた「刑法草案」

宝暦の改革で作られた「刑法草案」は大変先進的で、後の明治政府の刑法にも影響を与えた。新刑法作成には熊本出身の井上毅いのうえ たけしが大きな役割を果たし、熊本出身の最初の総理大臣、清浦奎吾きよら けいごが司法大臣を務めていた時に刑法の全面改正を担当するなど、熊本と刑法は強い結びつきをもっている。

人物伝

細川家9代

7代熊本藩主

ほそかわ はるとし 細川 治年

在位二年という短さで逝去

治年は宝暦九（1759）年花畑邸にて重賢の嫡男として生まれます。天明五（1785）年に重賢が死去し、

家督を遺領相続します。人となりは温厚で寡黙。父の善政を踏襲して旧臣に任せ、自ら動くことがなかったと伝えられています。

在任中は洪水が多く発生し、白川増水により、長六橋が流失。また阿蘇中岳が噴火し作物に多くの被害がでたそうです。

その他、在任中に熊本藩内で表彰された百人の孝行者をまとめた「肥後孝子伝」が大坂で出版されています。天明七（1787）年、わずかに在任2年という短さで、江戸で病氣により逝去します。



孝女千代

幼くして両親と別れながらも、祖父母を助けて田畑を守ったという千代。その孝行ぶりが藩主の耳に入り、褒美が与えられたという話が「肥後孝子伝」に記されている。津奈木太郎峠近くには千代塚のこるとともに、津奈木駅には馬を引く銅像が建っている。



治年年表

1759	宝暦9年	熊本花畑邸にて誕生
1774	安永3年	元服。將軍家治の諱を授けられ治年と称する。
1785	天明5年	遺領相続
1787	天明7年	発病し、実子幼年のため宇土支藩立札（斉茲）を養子にし逝去

人物伝

細川家10代

8代熊本藩主

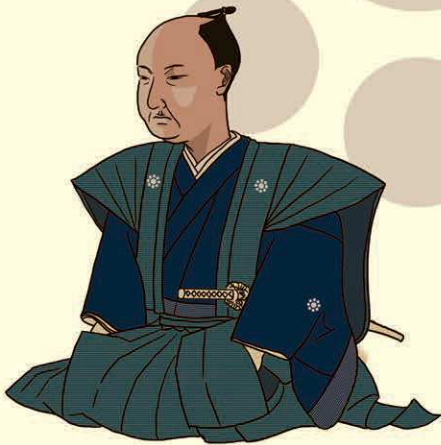
ほそかわ なりしげ 細川 斉茲

一夜塘を作ったお殿様

斉茲は宝暦九（1759）年宇土支藩細川興文の三男として生まれました。本家である七代藩主治年が病死し、

実子が幼年だったため治年の養子となり、家督を相続。文化七（1810）年に隠居したあと江戸の浜町に移住していたため「浜町様」と呼ばれました。

在任中には江戸や大坂、豊後鶴崎、佐敷等に文武稽古所を設立し、家臣の能力向上を図りました。一方、寛政四（1792）年には島原半島の眉山が噴火・崩落し大津波が発生、対岸の熊本でも多数の死者を出し、「島原大変肥後迷惑」と言われました。さらに同



八年には大洪水が起こったため、斉茲は現在の子飼橋付近に一夜塘と言われる堤防を作りました。

また、日本初の実測による日本地図「大日本沿海輿地全図」を完成させた伊能忠敬による肥後測量が行われました。

その後、嫡子の斉樹に家督をゆずり隠居していましたが、文政九（1826）年、斉樹が若くして逝去、跡を継いだ宇土支藩の斉護の後見役を務めますが、天保六（1835）年に逝去しました。

斉茲年表

1759	宝暦9年	宇土支藩主・細川興文の三男として誕生
1772	安永元年	父興文の隠居により家督相続
1787	天明7年	治年病死により本家の遺領相続
1810	文化7年	嫡子斉樹へ家督相続し隠居
1835	天保6年	逝去